

柿食へば、その他

目次

柿食へば……

- 一、 俳句とは
- 二、 俳句の鑑賞
- 三、 柿食へば…
- 四、 鐘が鳴るなり
- 五、 法隆寺
- 六、 結び

葛飾北斎の「富嶽三十六景」

- 一、 なぜか心惹かれる
- 二、 北斎という人

辞世の句

- 一、 浅野内匠頭
- 二、 西行
- 三、 在原業平

西行の「和歌」

- 一、 あはれを知る
- 二、 田子の浦ゆ
- 三、 変更の三箇所
- 四、 風になびく
- 五、 西行とは

※ 参考文献

柿食へば……

柿食へば……

例えば、正岡子規には、「……柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」という有名な俳句があるが、しかし、この俳句のどこがどのように優れているのか、よく分からないという人も意外に多いと聞くので、この問題についても、ごく簡単に説明しておきたいと思う。

まず、正岡子規という人は、一八六七年（慶応三年）十月に、伊予の国（愛媛県）松山の下級士族の家に生まれたという。そして、八〇年に、松山中学に入学し、その頃は、自由民権運動などに興味を持ち、政治家になろうとしたそうであるが、八九年（明治二二年）の五月、二十二歳の時、肺を患い、喀血かっけつしている。それを「啼ないて血を吐く」になぞらえて、初めて「子規」（意味はほととぎす）と号するようになるとともに、この頃は、哲学に興味を持ち、九〇年には、帝国大学（今の東大）の哲学科に入学するも、やがて、文学への興味も強くなり、国文科に転科するが、九二年には、退学をして、新聞社（日本新聞社）に入社している。その後は、新聞『日本』の紙上で、俳句、短歌、その他、文学の革新運動を進めることになるが、九五年に、日清戦争に自ら望んで新聞記者として従軍した帰途の、その船中で喀血して重体となり、その後は、床に伏して、俳句や短歌、その他の文筆活動などを死ぬ瞬間まで積極的に行ないながらも、一九〇二年（明治三五年）に、満三十四歳の若さで亡くなっている。ちなみに、夏目漱石も、同じ年（一八六七年）二月に生まれている。——それでは、「作品」の説明をごく簡単にしておきたいと思う。

まず、この「作品」は、一体、いつどこで詠まれた「作品」かと問えば、それは、明治二十八年（一八九五年）、正岡子規、二十八歳の時であるが、それは、自ら志願して、まさに「日清戦争」への従軍記者として行動した年であり、その帰国の船中で、正岡子規は、大喀血だいかっけつをし、重体に陥おちる。そのため、神戸病院に入院し、そして、その「……神戸の病院を出て須磨や故郷をぶらついた末に、東京へ帰ろうとして大阪まで来たのは十月の末であり、その時は腰の病のおこり始めた時で少し歩くのに困難を感じたが、奈良へ遊ぼうと思ひ、病を推おして出掛けて行た。三日ほど奈良に滞留の間は幸に病氣も強くならず、面白く見る事が出来た。この時は柿が盛さかんになっておる時で、奈良にも奈良近辺の村にも柿の林が見えて何とも言えない趣であった。柿などは従来詩人にも歌よみにも見離され、殊に奈良に柿を配合するなどは思ひもよらぬ事である。余はこの新しい配合を見つけ出して非常に嬉しかった」とある。正岡子規は、その「奈良」に十月二十六日から三日間遊び、その「旅宿」（對山樓《角定》）で、夕食後、柿が食たべたいと注文をしたら、山ほどの柿を持つて来て、その十六、七歳の色白の美しい下女（その下女に心惹ひかれる）が、皮をむいてくれて、その柿を食べていたら、たまたま鐘が鳴ったというのである。そこで、あの鐘は、どこの鐘かと尋ねたら、あれは、東大寺の大鈞鐘おほいねの初夜を打つ鐘だと教えられる。その時の歌が、まさに「長き夜や初夜の鐘撞つく東大寺」である。そして、翌日かに法隆寺を訪ねては、その「茶店」でたまたま休憩をして「柿」（御所柿）を食べていたら、まさに法隆寺の鐘が鳴ったということである。ただ、当日は雨が降っていたので、本当にそうだったかどうかは疑問視される向きもあるが、それはともかく、それらの様々な「体験・経験」などを基にして、いわゆる「作品」が生まれたということである。

一、俳句とは

では、「俳句」とは、一体、何かと問えば、それは、「小説」で言えば、まさに「私わたくし小説」であり、その人自身が実際に「見聞き経験したこと」などを基にして、その時の「実感」の「情景」を、いわゆる「五・七・五」で表現するのが、まさに「基本的な形」になるかと思う。もちろん、それは、それで「重み」のある世界ではあるが、ただ、ここで最も大事なことは、「実際」と「作品」との関係であり、例えば、正岡子規の場合には、有名な「写生」という「考え方」があり、それは、「実際」(つまり「実際に見聞き経験したこと」)を何よりも最重視して、それゆえ、いわゆる「虚構」というものは、いっさい排して、ただ「事実」だけで「作品」を創り上げようという「試み」にも似たものである。——例えば、秋暮るる奈良の旅籠や柿の味、長き夜や初夜の鐘撞く東大寺。これらは、一方の「極」であり、それを一言で言えば、それは、まさに「作品」||「実際」(「事実」)そのものである。一方、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)だけであれこれ「作品」を創り上げようとする場合もあるが、それが、もう一方の「極」であり、それを一言で言えば、まさに「作品」||その人の「空想(想像)内容」||「虚構」となるのである。

つまり、一方の「極」には、まさに「事実」そのものがあり、そして、もう一方の「極」には、まさに「虚構」そのものがある。あとは、その人自身が実際に「見聞き経験したこと」などを基にしながらも、その「事実の中」にどれだけ「虚構」を入れ込むのか？ それは、その人の「考え方」次第でみな違って来るとともに、それでは、何の為にそのような「虚構」を敢えて入れ込むのかと言えば、それは、まさにより魅力的な「内容」にするためである。——これは、すべてのことにあてはまることであり、例えば、歴史小説であれば、「歴史的事実」を「骨組み」として、その「隙間」を「虚構」で埋めて、より魅力的な内容にするのである。また、人の「身の上話」(或いは「体験談」)なども、基本は「事実」を基としながらも、それに様々な「脚色」がなされていくのである。

さて、「俳句」の場合、基本は、やはり「私小説」であり、その人自身が実際に「見聞き経験したこと」などを基にして、まさに「五・七・五」の形式で、実に様々な「作品」が生み出されることになるが、しかし、多くの場合、「実際」と「作品」とは、そのまま「イコール」ではなく、確かに、「実際」(つまり「様々な経験」)などを基としているが、しかし、「実際」(つまり「様々な経験」)だけを数多くかき集めても、それだけでは「作品」にはならないので、実際に「見聞き経験したこと」を基としながらも、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)で何度も「推敲」を積み重ねては、より内容の優れた「作品」へと仕上げ、最終的に「これでよい」というものに行っているのである。

二、作品の鑑賞

それでは、本題の「……柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」という「作品」の意味内容であるが、それは、まさに「……柿を食べていたら、たまたま法隆寺の鐘が鳴った」という、ただそれだけの「意味内容」だと思われがちである。しかし、「作品」というのは、不思議なものであり、作者の「意図」(「思惑」)とはまた別に、「作品」それ自身は、自らの「生命力」で、まさに「一人歩き」を始めるものである。——それは、作者自身、特に意図はしなかったのか、それとも潜在的には意図はしていたのか、そこは何とも判別しがたいが、

しかし、結果として、まさに己れの「人生の運命」を、知らず識らずのうちに、詠んできたことにもなるのである。つまり、「……柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」という作品は、一つは、文字通り、「……柿を食べていたら、たまたま法隆寺の鐘が鳴った」という本来の「意味合い」と、もう一つは、結果として、正岡子規自身の、まさに己れの「人生の運命」を暗示しているような作品にもなっているという、そういう二重の「意味合い」を持った「作品」へと、「作品」自身、自ら成長しているということである。

三、柿食へば…

まず最初は、「柿食へば」とあるが、柿を食べる時期とは、言うまでもなく、まさに「秋」（或いは「晩秋」）であり、しかも、秋から晩秋には、一般に柿の木からは、多くの葉っぱなども落ちて、残った葉っぱと柿の実だけで無数の枝などもはつきりと見えているような、そういう柿の木の「情景」などが自然と浮かんでくるかと思う。それはともかく、まさに「秋」（十月の末）、法隆寺の茶店で柿を食べていたら、たまたま法隆寺の鐘が鳴ったということであり、それゆえ、この俳句は、文字通り、「……柿を食べていたら、たまたま法隆寺の鐘が鳴った」という、ただそれだけの俳句と思われがちである。というのも、正岡子規という人は、いわゆる「写生」というものを非常に重んじた人であり、それゆえ、まさに「事実」（或いは「経験」というものを基として、その「事実」（或いは「経験」）にできるだけ沿いながらも、しかし、より優れた内容にするためには、敢えて、東大寺よりは、むしろ法隆寺の方を選んだという、そういう可能性もないとは言えないのである。それは、まさに「写生」（事実）だけにあくまでも固執し過ぎると、逆に、より優れた作品は、むしろ生まれにくくなってしまふ。松尾芭蕉は、それをはつきりと「体得」していて、「事実」だけがすべてではなく、その「事実」にできるだけ沿いながらも、しかし、より優れた「作品」にするためには、——それは、個々の「事実」から、より内容の優れた「普遍的なもの」へと「昇華」させるためには、むしろ「虚」と「実」とを絶妙に織り交ぜながら、最終的に「これでよい」という「作品」へと仕上げていくのである。

それはともかく、本題に戻りたいと思うが、本題をさらに「深読み」してみると、「柿食へば」というのは、すなわち、まさに「人生の秋（晩秋）を食べている」ということでもあり、それは、次のような「意味合い」にもなるわけである。——つまり、自分はまだ「若い」のに、自分は、すでに「人生の秋（晩秋）を食べている（迎えている）」ということでもあり、正岡子規自身、それをはつきりと自覚していたかどうかは別として、そういう「意味合い」にもなるということである。

四、鐘が鳴るなり

次に、「鐘が鳴るなり」とあるが、これもたまたま「鐘が鳴った」ということだけであり、それゆえ、それ以外の「意味合い」は、何もないように思われがちであるが、しかし、これも「深読み」してみると、——例えば、「鐘が鳴る」（或いは「鐘の響き」というのは、まさに諸行無常の「響き」でもあり、それは、「……すべてのものは変化し、形あるものは壊れ、生けるものも、やがては死んでいくということ」である。しかも、「鐘が

鳴るなり」とは、まさに「現在進行形」であり、鐘が鳴っているとは、正岡子規自身、それに気づいていてもいなくても、それは、まさに「自分の人生の運命（宿命）の鐘が鳴っている」ということでもあり、それをぼんやりと孤独聞いていたということである。

五、法隆寺

最後に、「法隆寺」とあるが、それでは、なぜ「法隆寺」なのか？ むろん、「東大寺」の鐘、「法隆寺」の鐘、どちらの「鐘」でも可能ではあるが、それを「法隆寺」にしたとすれば、その方が「作品」として遙かに「優れている」からであり、その理由としては、まず、「映像的」にも、まさに「五重塔と柿の木」等との組み合わせの方がより魅力的であるとともに、法隆寺の伝統的な佇まい、つまり、奈良、法隆寺、鐘の音、柿の実と木、御所柿、奈良の風景、その他との組み合わせの方が、より魅力的であり、しかも、「法隆寺」というのは、六〇七年、聖徳太子が建立したものであり、その遙か遠い昔からの大きな「歴史の流れ」のなかで、今も静かに佇む、中門、金堂、五重塔、夢殿、その他があり、特に金堂は、木造建築物としては、最古のものであるそうである。

さて、「鐘が鳴るなり」とは、朝方か、昼間か、或いは、夕方かと思うが、「東大寺」の初夜の鐘であれば、それは、夕食後の夜（八時頃）であり、一方、「法隆寺」の鐘であれば、それは恐らく、昼間の鐘になるのだろう。それは、法隆寺の茶店に憩ひて、たまたま「柿」（御所柿）を食べていたら、まさに法隆寺の「鐘」が鳴ったということであり、その時は、むろん、鐘が鳴るなどとは全く予想だにしていなかっただろうから、その瞬間、正岡子規の「心の中」では、一瞬、まさに「ハッ」と驚く（それは「かなり強く心が動いたこと」は間違いない）、それは、今までの「静寂」の状態のなかに、突然、その「静寂」をうち破る法隆寺の「鐘」が鳴り響き、やがて、また、「静寂」の状態へと戻って行ったという、まさにその「決定的瞬間」を見事にとらえた句でもあり、しかも、その時は、正岡子規自身、何気なくその「鐘の音」を聞いていたとしても、しかし、結果としては、まさに正岡子規の「人生の運命（宿命）の鐘」（つまりは「諸行無常の鐘」）が鳴り響いていたということにもなるのだろう。

六、結び

ちなみに、作品として、最も「魅力的な情景」はと問えば、それは、むしろ「夕方」であり、実際の「情景」とは違うが、敢えて「夕暮れ」の情景をイメージしてみると、例えば、遠方には山なみがあり、そして、その夕空一面はあかね色に染まり、しかも、柿の木や法隆寺の五重塔、その他、全体の「情景」は、むしろ「シルエット」のようにくっきりと浮かび上っている情景であり、さらに、その「静寂な空間」には、夕方の「鐘の音」が響いているという情景になるかと思う。それは、まさに「秋」（晩秋）の夕暮れの「一幅の絵」のような極めて「美しい情景」になるかと思う。しかも、正岡子規自身は、孤独、まさに「諸行無常の響き」のなかで、まるで「一幅の絵」のような極めて「美しい情景」をぼんやりと眺めているということになるのだろう。もちろん、それは、あくまでも「夕方の鐘の音」を孤独ぼんやりと聞いているという「設定」の場合である。……

柿食へば
己が宿命の
鐘の音か

*

*

葛飾北斎の「富嶽三十六景」

葛飾北斎の「富嶽三十六景」について

例えば、富士山という山は、当然のことながら、富士山それだけで存在しているものは決してなく、まわりには実に様々な風景（或いは「背景」）が存在するというのである。つまり、五大湖を初めとして、様々な森林や山なみあるいは雲海、もちろん、広々とした大空おおぞらもあり、しかも、それは、春夏秋冬、朝、昼、夕方、夜、夜明け、あるいは、晴れた日、曇った日、雨の日、そして、雪の日、その他などによっても、富士山の表情は、実に様々に変化するものである。すなわち、富士山の「美」というのは、「富士山」そのものと、そのまわりの様々な風景（或いは「背景」）からなり立っているということである。そして、それを実際に絵に描いて見せてくれたのが、まさに葛飾北斎の「富嶽三十六景」とそれに「プラス十枚の四十六景」ということになるのだろう。……

つまり、葛飾北斎にとって、いわゆる「富士山」という山は、まさに「絶対美」であり、その「絶対美」である「富士山」をいわば「中心核」として、葛飾北斎の「頭の中」（或いは「心の中」）であれこれ思い描いた、富士山が最も魅力的に見える、まさにこれこそ最高の「富士山」の姿であるというようなものを、いわゆる「三十六景」（つまり富士山がより魅力的に見えるような様々な「風景や背景や地域」など）で描いたということである。つまり、富士山の「美」というのは、「富士山」そのものと、そのまわりの様々な風景（或いは「背景」）からなり立っているということであり、それを当時の風景や地域（様々な庶民の生活や風俗）なども一緒に実際に「絵」にして見せてくれているのが、まさに葛飾北斎の「富嶽三十六景」（プラス十枚の四十六景）ということになるのだろう。

一、なぜか心惹かれる

例えば、西行にとって、いわゆる「桜」という「花」は、自分でもどうしようもなく心惹かれてしまうような対象であったかと思うが、それと全く同じように、葛飾北斎にとっても、いわゆる「富士山」という「山」は、自分でもどうしようもなく心惹かれるような対象の一つであったことは、恐らく、間違いないことだろう。そうでなければ、これほど数多くの「富嶽三十六景」や「富士百景」までも敢えて描き続けるようなことはしなかつただろう。つまり、われわれ人間というのは、自分でもその理由がはっきりと分からなくても、なぜか「ある対象」に自分でもどうしようもなく心惹かれてしまうような対象というものは、（うそ偽りなく）、誰にもあるということである。

それでは、その「対象」とは、その人にとっていったいどういふものになるのかと問えば、それは、まさに「その人の心」と「その対象」とは、お互いどこまでも深く重なり合う部分があり、それゆえ、その部分がおのずと深く「共感・共鳴」していることである。——つまり、西行にとって、「西行の心」と「桜の花」とは、お互いどこまでも深く「重なり合う部分」があり、それゆえ、その部分がおのずと深く「共感・共鳴」していることである。また、葛飾北斎にとって、「北斎の心」と「富士の山」とは、お互いどこまでも深く「重なり合う部分」があり、それゆえ、その部分がおのずと深く「共感・共鳴」していることである。すなわち、「桜の花」というのは、まさに「西行の心」を最も「象徴するようなもの」であり、また、「富士山」というのは、まさに「北斎

の心」を最も「象徴するようなもの」になるということである。

それは、例えば、ファン・ゴッホにとって、いわゆる「ひまわりの花」というのは、いったいどういうものになるのかと問えば、それは、まさに「ゴッホの心」と「ひまわりの花」とは、お互いどこまでも深く「重なり合う部分」があり、それゆえ、その部分がおのずと深く「共感・共鳴」しているということである。すなわち、「ひまわりの花」というのは、まさに「ゴッホの心」を最も「象徴するようなもの」になるということである

二、北斎という人

ちなみに、北斎という人は、まさに「かき魔」であり、とにかく、絵を描かずにはいられないような人であったとともに、その「絵」は、広重のような実景を重視するような「風景画」というよりは、むしろ北斎の「頭の中」(或いは「心の中」)で新たに創り出した(イメージ)した「絵」になっている場合が多いのだろう。また、北斎は、掃除もしなければ、食事も作らず、また、身なりも気にせず、何度も引越(九十三回)もしたり、その他、実に様々な「逸話」(エピソード)を残しているが、それらは、一体、何を意味するのかと敢えて問えば、それは、まさに次のようなことである。——つまり、葛飾北斎という人が、唯一「心の底」からほんとうにこだわったのは、まさに「絵を描くということ」だけであり、それ以外は、結局は、どうでもよかつたのである。そして、何よりも「最先させたもの」こそは、ほかでもない、それは、まさに「すべての時間」をひたすら「絵を描くことだけに費やしたかった」ということである。

また、実に数多くの名前を使っていたが、むろん、それにもいろいろな理由があつたであろうが、その一つとして、その時々自分の心に合った「名前」を使っていたということでもあるのだろう。そして、晩年の名前として有名なものが、いわゆる「画狂老人」(まんじ)という名前であり、それが晩年の「北斎の心」にぴたりと合った名前ということになるのだろう。——それに加えて、「北斎」という名前は、いわゆる「北斗七星」のことでもあり、その意味するところは、恐らく、自分は、日本一の画家、あるいは世界一の画家であると思っていたか、(あるいはそうなりたいと考えていて)、それゆえ、北斎という人は、恐らく、森羅万象、どのような「絵」でも、また、どのような視点からも、「絵」を描くことができると、敢えて自負しようと思えば、あるいはできたのかも知れない。その証拠となるものが、まさに『葛飾漫画』(全十五編)を初めとした、「富獄三十六景」や「富士百景」その他の実に様々な作品ということになるのだろう。

最後に、「……翁おきな 死に臨み大息おおいきし 天我われをして十年の命を長らわしむといひ、暫しばらくして更に言こといて曰く 天我われをして五年の命を保たもたしめば 真正ほんものの画工となるを得うべしと言こと吃いりて死す」とある。これは、非常に興味深い「言葉」であり、その内容は、「……天があと十年、いや、あと五年、生きることを許すならば、真正ほんものの画工となり得ただろう」という意味内容であり、それは、なおも先を見ていたとともに、葛飾北斎という人は、最後の最後まで、いわば「絵がすべてであつた」という、そういう天性の「絵描き」であつたという何よりの証拠となり得るものである。

*

*

富士^{おも}想^{おも}へば
描^{えが}かずにいらぬ
かき魔かな

辞世の句

「辞世の句」について

例えば、殿中で事件を起こした浅野内匠頭たくみのかみは、いわゆる「風さそふ花よりもなほわれはまた春のなごりをいかにとやせん」という有名な「辞世の句」を遺し、（その真偽はともかく）、切腹をして無念の死を遂げる結果になってしまったわけである。それゆえ、浅野内匠頭たくみのかみにしてみれば、どうしてもまだ「死ぬに死にきれないという思い」が残っていて、それが辞世の句の中にも反映されているとみてもよいのではないかと思う。そこで、例えば、大石内蔵助がこの「辞世の句」を読めば、（もちろん、読まなくても全く同じことであるが）、例えば、「……わが主君は、死ぬに死にきれない思いを遺して死んでいった。それゆえ、主君の遺した果たせなかつた思いを果たさなければ、主君の魂は、永遠に浮かばれない。この世に未練を残したまま留まり、成仏してあの世に旅立つことができない」と思い定めたとしても、何も不思議なことではない。恐らく、大石内蔵助は、比較的早い段階から、いわゆる「主君の仇を討つ」という考え方に襲われていたに違いない。もちろん、それは、お家再興、その他、ひと通りのことは、やり尽くして、それでもなおだめな時の「最後の手段」として考えていたということである。そして、大石内蔵助に取り憑いたそのような「考え方」（仇討ち）は、如何なる苦難・如何なる困難に直面しても、一貫して変わることはなかつたということである。なぜなら、「……主君の仇を討たなければ、主君の魂は、永遠に成仏できない」からである。それでは、誰がそれをやるのか？ それは、結局、自分がやるしかないという、そういう「決心」（覚悟）なのである。

*

*

次に、西行には、「願はくは、花の下にて春死なん、そのきさらぎの望月のころ」という、非常に有名な「歌」があり、もちろん、この「歌」は、いわゆる「辞世の句」ではなく、恐らく、西行が六〇歳前後から中頃の「作品」ではないかと推測されて、未だ定かではない状況であるが、しかし、人間は、いつ死ぬか誰にもよく分からないものであり、その当時の西行にしても、「……たとえ今日は生きていても、明日はどうなるかまったく分からない」という、そういう「無常」のなかで詠まれた「歌」であることに何ら変わりはないだろう。しかも、西行は、結局、死に臨んでの「辞世の句」というものを詠んではないということ、逆に言えば、この「句」をそのまま「辞世の句」と考えていたとしても、何も不思議なことはないのである。

それでは、この「歌」の意味合いは、一体、どういうものになるのかと言えば、それは、極めて簡単であり、「……願わくは、花の下にて春死にたい、しかも、それは、きさらぎの望月のころ（つまり『二月十五日』のころ）であることを願う」ということである。つまり、一つは、桜の花の下、一つは、二月十五日、という限定付きになっている。これは、一体、どういうことなのか？ まず、考えてみなければならぬことは、この「歌」は、その場の興に応じてとか、何か思いつきなどで詠まれた歌などでは決してなく、むしろ全くそ偽りない、西行のあるがままの「実の心」の発露であるとともに、心の底からの衷心からの「深い思い」（最晩年は決心）であり、それは、死ぬその日まで一貫して揺らぐことがなかつたということである。——ところが、当時の歌人たちは、そのように「この歌」を読むことができなかった。俊成も、できなかった。なぜ、できなかったのか？ それは、誰も西行のようには「歌を詠んではいなかった」からである。当時の歌人たちは、

いわば「歌をつくるために歌を詠んでいた」ということであり、一方、西行は、一つは、「自心を知る」ためであり、それは、自分の「心を見極める」ということであり、そして、もう一つは、和歌を詠むことよって、最終的には「悟りを開く」ということであり、それは、いわば「釈迦（仏陀）」と終には「一体となる地点」へと辿り着くということである。そして、西行は、まさに「……望月（満月）の頃、満開の桜の花の下で、静かに乱れることなく息を引き取った」ということになるわけである。

そして、それをさらに「深読み」すると、「満開の桜」とは、いわば「歌の成就」であり、そして、「望月（満月）」とは、まさに「心の成就」を、それぞれ象徴していることになるのかも知れない。もちろん、「歌」を詠んだその当初は、西行自身、まだ晩年ほどはつきりとした自覚はなく、できればそうでありたいと願う程度であったとしても、この「歌」は、西行自身の「心の中」で次第に「成長・成熟」して、やがては極めて「大きな意味」を持つようになり、そして、その最晩年において、西行自身が心の底から「願ったこと」とは、すなわち、一つは、まさに「歌の成就」であり、そして、もう一つは、まさに「心の成就」であったということである。つまり、「……願はくは、花の下にて春死なん、そのきさらぎの望月のころ」という歌は、西行自身の「心の中」で、次第に「成長・成熟」して、最終的には「辞世の句」そのものにまでなり果せたということである。

最後に、『伊勢物語』の最終章（百二十五）は、「つひにゆく道」という題であり、それは、「……むかし、男、わずらひて、心地死ぬべくおぼえければ……」という「文章」のあとに、「つひにゆく道とはかねて聞きしかど、きのふけふとは思はざりしを」という、非常に有名な歌で終わっているわけである。そして、この「歌」は、まさに死に臨んでの「辞世の句」であり、作者は、極めて有名な「在原業平」であり、その業平は、元慶四年（八八〇年）五月二十八日に、五十六歳で亡くなっているということである。

ところで、この「歌」を取り上げた理由であるが、それは、この「歌」こそは、この世にある実に数多くの「辞世の句」のなかでも、まさに「最高傑作の一つ」ではないかと思うからである。それでは、なぜ、そう思うのか？ それは、次のような理由からである。まず、歌の意味内容であるが、それは、「つひにゆく道」とは、すなわち、「死ぬ」ということであり、また、「かねて聞きしかど」というのは、「前々から聞いて、よく知ってはいるけれど」という感じであり、それゆえ、全体の意味合いは、次のようになるかと思う。つまり、「……われわれは、この世に生まれて生きて、やがては死んでいくものだと、誰でもよく知ってはいるが、しかし、自分が〈死ぬ日〉が、まさか昨日今日という、こんなにも早く、こんなにも差し迫って、やってくるとは思わなかったなあ」ということである。そして、そのような「想い」こそは、まさに死を迎える人たちの最後の「実感」そのものだろうと思うからであるとともに、古今東西を問うまでもなく、実に数多くの人たちが、同じような「想い」を遺してこの世を去っていったに違いないと思うからである。それは、すなわち、「……つひにゆく道とはかねて聞きしかど、きのふけふとは思はざりしを」ということである。

*

*

西行の「和歌」

西行の「和歌」について

例えば、西行には、「……心なき身にもあはれは知られけり鳴たつ沢の秋の夕ぐれ」という非常に有名な和歌があるので、この和歌についても、すこし考えてみたいと思う。

まず、この和歌は、大きく「前半部分」と「後半部分」とに分かれ、そして、「前半部分」は、「西行自身の心の動き」であり、そして、「後半部分」は、まさに「自然の風景そのもの」であるとともに、その「自然の風景そのもの」を見たときに、いわゆる「西行自身の心の動き」がはっきりと生じたという内容になっているかと思う。それでは、「後半部分」の「鳴たつ沢の秋の夕ぐれ」というのは、具体的にはいったいどういう風景になるのだろうか？ まず、「鳴」であるが、この「鳥」は、海岸や干潟などに棲む「浜鷗」を初めとして、水田や湿地などに棲む「田鷗」、そして、山などに棲む「山鷗」というように、極めて広い範囲に渡って棲んでいる「鳥」になるということである。

それでは、歌に詠まれていく「鳴」は、一体、どこに棲む「鳴」になるのだろうか？ むろん、ふつうに考えれば、「沢」とあるので、それは、山などに棲む「山鷗」になるかと思うが、それに加えて、もう一つ、飛び立った鳴は、一羽なのか、数羽なのか、それとも数多くの鳴がいつせいに飛び立ったのか、それもよく分からない。しかし、西行は、その「鳴たつ沢の秋の夕ぐれ」を見た時に、思わず「……心なき身にもあはれは知られけり」という「心の状態」になったということである。それは、一体、どういうことなのか？

まず、西行は、その「自然（沢）の夕暮れの風景」の中に、まさか「鳴」が居ることなどは、露ほども知らなかったわけである。それゆえ、突然、バタバタと羽音を立てて飛び立った時には、西行は、一瞬、まさに「ハッ」と驚き、そして、「……何だ、何が起こったんだ！」というような「想い」にふと襲われたかも知れない。そして、「何だ、鳥（鳴）が飛び立った音か！」と、再び、閉けさを取り戻したかと思うが、この今までの「静寂」の状態の中に、突然の「動」が生じ、そして、また、「静寂」へと戻って行ったという、この「パターン」は、例えば、松尾芭蕉の「古池と蛙」、正岡子規の「柿食へばと鐘の音」、そして、この「心なきと鳴たつ沢の秋の夕ぐれ」とは、すべて「同じ展開」であり、まさに今までの「静寂」の状態の中に、突然の「動」が生じ、そして、また、「静寂」へと戻って行ったという、まさに《その決定的「瞬間」を見事にとらえたものであり、その「瞬間」、彼らの「心」は、間違いなく「動いた」ということであり、それでは、なぜ、どのように「動いたのか？」、それを徹底的に見極めては、その「情景」をできるだけ「五七五」で的確に表現したものが、まさに彼らの「作品」ということになるのだろうか。

では、次は、その歌の「意味内容」であるが、まず、西行は、鳥（鳴）が、突然、バタバタと羽音を立てて飛び立ち、そして、再び、閉けさを取り戻した時に、西行は、まさに「心なき身にもあはれは知られけり」という、そういう「心の状態」になったということである。それでは、最初の「心なき身」という言葉の解釈であるが、それには、大きく「二つの考え方」があり、その一つは、「物事の情趣などはあまり解さない身」（それは、一般に、人情の機微や物事の情趣などをあまり解さない、自分のような身）でも、さすがにこの「自然の情景」には「あはれ（しみじみとした情趣）は知られけり（感じられた）」という解釈であり、それが、「二つの解釈」であり、そして、もう一つは、「心なき身」（つまり「僧侶の身」、それは、俗世の様々な「欲望や感情」その他などを捨て去った心）に

も、さすがにこの「自然の情景」には「あはれ（しみじみとした情趣）は知られけり（感じられた）」という解釈であり、これが、まさに「もう一つの解釈」になるのである。

一、あはれを知る

それでは、次の「……あはれは知られけり」という言葉の解釈になるが、それを一言で言えば、それは、まさに「あわれを実感した」（つまり「深く心に感じ入った」ということである。それでは、一般に、「ものあわれを知る」というのは、一体、どういうことなのかと問えば、それについては、本居宣長という人は、次のように語っている。

つまり、「……世の中にありとしある事のさまさまを、目に見るにつけ耳に聞くにつけ、身にふるゝにつけて、其のよろづの事を心にあぢはへて、そのよろづの事の心をわが心にわきまへ知る、是れ事の心を知る也。物の心を知る也。物のあはれを知るなり。わきまへ知る所は物の心・事の心を知るといふもの也。わきまへ知りて、其の品にしたがひて感じる所が物のあはれ也。……」（『紫文要領』とある。

さて、この「文章」を何度も何度も「一字一句」丁寧かつじっくりと噛みしめるように深く読んでもらえれば、その「意味するところ」は、自ずと見えて来るかと思う。

例えば、「物の心」というのは、その「物」自身が本来（もともと）持っている、その「物」そのものがあるがままの「姿、形、雰囲気、様子、内容、特徴、その他」のことであり、そのあるがままの「物」をまさにあるがままにそのまま自分の「心の中」に受け入れ味わたった時に、自分の「心」は、一体、どのように動くのか、素晴らしいと動くのか、それとも、取るに足らないと動くのか、それがその「物」に対する、その人があるがままの「情」の発露になるのである。——それは、「事の心」というのも、全く同じことであり、「事の心」というのは、その「事」（事柄）自身が本来（もともと）持っている、その「事」（事柄）そのものがあるがままの「姿、形、雰囲気、様子、内容、特徴、その他」のことであり、そのあるがままの「事」（事柄）をまさにあるがままにそのまま自分の「心の中」に受け入れ味わたった時に、自分の「心」は、一体、どのように動くのか、素晴らしいと動くのか、それとも、取るに足らないと動くのか、それがその「事」（事柄）に対する、その人があるがままの「情」の発露になるのである。そして、西行の場合には、「……鳴たつ沢の秋の夕ぐれ」という「事物」を見た時（つまり「心の中」にそれをそのまま受け入れた時）に、まさに「……心なき身にもあはれは知られけり」という、そういう「心の状態」になったということである。

それでは、なぜ、そのような「心の状態」になったのか？ それは、次のようなことである。——つまり、その瞬間は、西行は、特にこれということも、ましてや、鳥（鳴）のことなどはまったく考えてもいなかっただろう。それは、どこか「無心」に近いような状態であり、その「無心」に近いような状態の時に、突然、バタバタと羽音を立てて鳥（鳴）が飛び立ったのである。だからこそ、西行は、一瞬、まさに「ハッ」と驚き、そして、「……何だ、何が起こったんだ！」というような「想い」にもふと襲われるのである。そして、「何だ、鳥（鳴）が飛び立った音か！」と、再び、閑けさを取り戻したかと思うが、それゆえ、そこで元の「心の状態」に戻ってしまえば、それで終わりであり、そこからは、何も生まれようがないのである。それゆえ、何よりも大事なことは、その瞬間、西行の「心」

は、間違いなく「動いた」のであり、それでは、なぜ「動いた」のか、あるいは、どのように「動いた」のか、それを徹底的に「見極める」ことこそは、何よりも大事なことであり、そのような経緯を経て、——例えば、松尾芭蕉の「古池や…」も、また、正岡子規の「柿食へば…」も、そして、この西行の「心なき身にも…」という作品も、まさにそのようにして、この世に生み出されてきたということである。

逆に、その瞬間、どこか「無心」に近い状態ではなく、例えば、西行の「心の中」で何らかの「思いや考え」などに強くとらわれていたならば、突然、バタバタと羽音を立てて鳥（嶋しま）が飛び立っても、その瞬間は、たとえ「ハッ」と驚いても、すぐに元の「心の状態」に戻ってしまい、何事もなく、終わってしまっただろう。それゆえ、この「無心」に近い状態こそは、まさに最も大事な「心の状態」であり、もし、その人が、例えば、この世の実に様々な「欲望や感情」などに強く振りまわされていたり、また、この世の実に様々な「利害損得」などに強くとらわれていたり、つまり、この世の実に様々な「欲望や感情」（或いは「利害損得」）などに強くとらわれている「心的状態」では、例えば、松尾芭蕉の「古池や…」も、また、正岡子規の「柿食へば…」も、そして、この西行の「心なき身にも…」という作品も、この世に生み出されるようなことはなかったのである。

つまり、何よりも大事なことは、まさに「無心」（例えば、西行であれば、「虚空こくうの如くなる心」）の「心の状態」（いわば「無色透明な心」）で、この世の実に様々な事物を見聞き触れ味わえば、その様々な事物は、まさにあるがままに見えて来るものであり、そのあるがままに見えてきた「事物」（つまり「事や物」）こそは、まさにそれぞれの「事物の心」（「事の心」や「物の心」）であり、そのあるがままの「事物の心」（「事の心」や「物の心」）を、まさにあるがままに自分の「心の中」に受け入れ味わった時に、自分の心は、一体、どのように動くのか？ 楽しと動くのか、それとも、哀しと動くのか、或いは、つまらないと動くのか、それがその「事物」に対する、その人のあるがままの「情」の発露になるということである。

例えば、「お祭り」という「事物」があるがままに見聞き触れ味わえば、まさにあるがままの「お祭り」というものを、まさにあるがままに見聞き触れ味わったことになるが、そのあるがままに見聞き触れ味わったものこそは、まさにあるがままのその「祭り」というものの「事物の心」（「事の心」や「物の心」）であるということである。そして、そのあるがままの「祭り」という「事物」を、まさにあるがままに自分の「心の中」にそのまま受け入れ味わった時に、自分の「心」は、一体、どのように動くのか？ 楽しと動くのか、それとも、哀しと動くのか、或いは、つまらないと動くのか、それがその「祭り」という「事物」に対する、その人のあるがままの「情」の発露ということである。そして、一般に、「お祭り」という「事物」があるがままに見聞き触れ味わえば、ふつう「楽しと心が動く」かと思うが、それがわれわれ人間のあるがままの「情」の発露であり、また、「お葬式」という「事物」をそのままあるがままに見聞き触れ味わえば、ふつう「哀しと心が動く」かと思うが、それがわれわれ人間のあるがままの「情」の発露であり、そのように、この世の実に様々な「事物」があるがままに見聞き触れ味わった時に、まさにあるがままに動くわれわれ人間の「情」こそは、まさにわれわれ人間の「人情」であり、そのわれわれ人間の「人情の機微」や物事の様々な「情趣」（しみじみとした味わい）などを深く解するのが、まさに「ものあわれを知る」ということである。

それゆえ、一般に、「心ない人」というのは、いわば「ものあわれを解さない人」ということであり、一方、「心ある人」というのは、まさに「ものあわれを解する人、それをもっと具体的に言えば、一般に、人情の機微や様々な物事の情趣（しみじみとした味わい）などを解する人」ということになるのである。

それに加えて、もう一つ、ここで考えてみなければならぬ問題は、まさに「心なき身にも」の「も」という言葉であり、それは、「心なき身にもあはれは知られけり」ということであれば、「心ある身であれば、なおさらあはれは知られけり」ということになるのかどうか。もしそうであるならば、それは、誰が見ても、「ものあわれを感じる」ような情景であったということになり、前者の「考え方」（解釈）に近くなるかと思う。

一方、西行だからこそ、それは、西行の「心」が、「無心」に近いような状態だったからこそ、まさに「ものあわれを感じる」ことができた」ということであれば、それは、この世の実に様々な「欲望や感情」（或いは「利害損得」）などに強くとらわれている「心の状態」では、恐らく、「ものあわれを感じる」ことができなかつただろう」ということになり、それは、後者の「考え方」に近くなるかと思う。

それでは、そのどちらかと問われれば、西行自身は恐らく、誰が見ても、「ものあわれを感じる」ような情景であったということが、言いたかつたに違いない。それが、まさに「も」という言葉の「重さ」であり、しかし、実際は、西行だからこそ、まさに「ものあわれを感じる」ことができた」という結論になるのである。

二、田子の浦ゆ

例えば、「……田子の浦ゆうち出でて見れば真白にそ富士の高峰に雪はふりける」という、これも極めて有名な歌であるが、この和歌も「同じような内容のもの」であり、それは、この歌の中に詠まれている風景、それは、「……田子の浦から出でて、ふと富士山の方を見てみたら、なんと富士の高峰が降った雪で真つ白になつていて姿がくつきりと見えだよ」ということであり、そのあまりにも美しい「情景」（風景）というものは、ある人々には、「美しく見え」て、また、ある人々には、「美しく見えない」というような、そういう相対的な「美しさ」などでは決してなく、それをもっと極言すれば、この世の誰であれ、それは、小さな子供からお年寄りまで、老若男女を問わず、また、教養があるうがなかるうが、また、どのような職業に就いている人であろうがなかるうが、そのようなこととはまったく関係なく、この世の誰であっても、人間でありさえすれば、必ずや「心が動く」（つまり「美しさを感じる」）に違いないような風景であり、そういうまさに絶対的な「美しさ」（つまり「絶対美」の美しさ）であったということである。それゆえ、この「歌」は、富士山を詠んだ数多くの和歌のなかでも、まさに「最高傑作」の一つとなり得ているものである。

ちなみに、百人一首では、「田子の浦にうち出でてみれば、白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ」となっている。この「歌」の場合は、富士の高嶺に雪は降りつつ（つまり「降っている」という状態である。だとすれば、天候は、雪であり、雪であれば、富士の高嶺には「雲か霧」がかかっているか、たとえ富士の高嶺が見えていても、それは、ほとんどぼんやりとかすんだ風景になってしまうだろう。その風景を見て、人の心は、感動するだ

ろうか？——一方、『万葉集』の山部赤人の「歌」は、「田子の浦ゆうち出でて見れば真白にそ富士の高峰に雪はふりける」とある。それでは、この「歌」と前述の「歌」とでは、一体、どこがどのように違うのかと問えば、それは、次のようなところである。

まず、「天候」は、前者は、雪であり、雪が降っている。この天候では、恐らく、富士の高嶺には「雲か霧」がかかってしまい、実際には富士山は見えないだろう。一方、後者は、雪はすでに降りやんで、恐らく、「曇りか晴れか」そのどちらかである。もし晴れていれば、その晴れた「大空一面」を背景に、「……ふと富士山の方を見てみたら、なんと降った雪で富士の高峰が真つ白になってる姿がくつきりと見えたよ」ということであり、そのあまりにも美しい「情景」（風景）というものは、ある人たちには、「美しく見え」て、また、ある人たちには、「美しく見えない」というような、そういう相対的な「美しさ」などでは決してなく、人間でありさえすれば、必ずや「心が動く」（つまり「美しさを感じる」）に違いないような風景であり、それは、まさに絶対的な「美しさ」（つまり「絶対美」の美しさ）であったということである。

四、変更の三箇所

ちなみに、変更の「三箇所」は、一つは、「ゆ」から「に」へ、一つは、「真白にそ」から「白妙」に、一つは、「ふりける」から「降りつつ」へと変えている。最初の「ゆ」から「に」は、いわば「見た場所の位置の違い」であり、「ゆ」から「に」へと変えると、その「意味」は、「……田子の浦に出てみると、真つ白な富士の高嶺にさらに今も雪が降り続けているよ」ということになり、これでは、田子の浦から富士山が見えているという解釈になってしまう。——一方の「田子の浦ゆうち出でてみれば」には、大きく次の二つの「解釈」があり、その一つは、田子の浦から船に乗って、その船上から富士山を見るという解釈であり、もう一つは、田子の浦を通して、見晴らしのよいところへと出て、富士山を見るところという解釈である。それでは、なぜ、そのような解釈になるのか？ それは、奈良時代の「田子の浦」というのは、今の「田子の浦」とは違って、今の「由比」あたりであり、その「由比」あたりは、山が海に迫り、富士山は山のかげに隠れて、奈良時代の「田子の浦」（今の「由比」あたり）からは、富士山は見えないのである。それゆえ、その奈良時代の「田子の浦」（今の「由比」あたり）を通過して、見晴らしのよい所へと出て、富士山を見るところという解釈になるのである。それをもっと分かりやすく説明すると、「……富士山が見えない所をずっと歩きながら通っては、やっと富士山が見えるような見晴らしのよい所へと出て、富士山を見てみたら、なんと降った雪で、富士の高峰が真つ白になっている姿がくつきりと見えたよ」という、そういう「驚き」と「感動」があるのである。

さらに、大事なものは、残りの「二つ」であり、一つは、「真白にそ」から「白妙」へ、もう一つは、「ふりける」から「降りつつ」へと変えると、それは、「……白妙の富士の高嶺に雪はなお降りつつ」となるが、その場合の「意味」は、すでに「……白妙（真つ白な）富士の高嶺にさらに雪が降りつつ、いてるよ」という「意味合い」になってしまう。しかし、『万葉集』の山部赤人の「歌」の方は、そうではなく、雪が降ったのは昨日かその前か、それとも今日まで降っていたが、今の天候は、曇りか晴れであり、そして、「……ふと富士山の方を見てみたら、なんと降った雪で富士の高峰が真つ白になっている姿

がくつきりと見えたよ」ということであり、そこには、まさに「驚き」と「感動」があるのである。それゆえ、この「二つ」だけは、絶対に変えてはいけないものであり、もし、この「二つ」を変えてしまえば、歌人の富士山を見た時の「感動」そのものが消えてしまうのである。——つまり、百人一首の歌は、所詮「頭の中」(或いは「心の中」)だけで勝手に作り上げた、いわば「虚構の世界」に過ぎず、一方、『万葉集』の山部赤人の「歌」は、まさに実際に富士山を見た時の「感動」そのものを基にして創られた「歌」であり、そこには、決定的な「違い」があるということである。

四、風になびく

さて、次は、「……風になびくふじのけぶりの空に消えて行へもしらぬわが思ひかな」という、これも極めて有名な富士山を詠んだ和歌であり、しかも、西行は、この和歌を「自賛歌」(つまり「自賛歌」)の筆頭に上げるほどであったという。そして、「自賛歌」ということは、まさに「自信作」であり、その「自信作」とは、すなわち、「作品」と「作者の心」とは、まさに「ぴったり」と一つに重なり合っていて、ズレをまったく感じない」という「心の状態」である。それでは、その和歌についても、少し考えてみたいと思う。

まず、この和歌には、詞書ことばがきがあり、それは、「……東の方へ修行し侍りけるに、富士の山をよめる」というものである。これは、西行が六十九歳の時に、「……重源ちゅうげん上人の約諾を請け(つまり頼まれて)、東大寺料として砂金を勧進せんが為、奥州に赴いた」時の「和歌」である。そして、この「旅」を「修行」とはつきりと明記しているということは、すなわち、「世俗的な思惑」などは一切なく、ただただ「東大寺大仏再建のために沙金の寄付をお願いするため」だけの旅であったということである。

さて、最初は、「……風になびくふじのけぶりの空に消えて」という部分であるが、その「風景」を敢えて一つ一つ確認してみると、次のようになるかと思う。——つまり、それは、富士の「頂上からけむりが出ている」ということと、そのけむりは、やがて「空に消えていった」ということである。——そうだとすれば、少なくとも「富士の頂上」には、雲はかかっておらず、恐らく、「晴れ」の状態に近く、しかも、けむりは、やがて「大空に消えていった」ということであるので、それは、もくもくと出るようなけむりではなく、むしろやがては消えていくようなけむりであったということである。

もちろん、ここまでは「自然の風景」の描写に過ぎないが、しかし、ここで最も大事なことは、次のようなことである。つまり、西行は、その「自然の風景」を、そのまま自分の心の「心象風景」と重ね合わせているということであり、それをもつと言えば、むしろほとんど「一体化させている」ということである。すなわち、「自然の風景」と自分の心の「心象風景」とをほとんど「一体化させている」ということである。だとすれば、西行の心の中には、ほとんど「雲」はかかっておらず、また、西行の心に生じて来る様々な「思いや考え」(つまり「けむり」)なども、やがては「大空に消えていく」ようなものであったということである。それは、一体、どういうことなのか？ それは、自分の「心の中」に生じて来る様々な「思いや感情」(つまり「煩惱」)などにも、もう意味なく振りまわされるようなことがなくなったということであり、それは、西行自身の「心の状態」が、ほとんど「最終段階」(つまり「空」《悟り》の地点)にまで到達していたということである。

あるとともに、それを別の言葉で言い換えれば、それは、すなわち、いわゆる「虚空の如くなる心」(つまり「大空のような無色透明な心」)になっていったということである。だからこそ、西行は、この歌を自分の「自歎歌」(つまり「自賛歌」)の筆頭に上げるほどであったとともに、この「歌」こそは、まさに「自分」(西行)が辿り着いた最究極の「心の状態」(つまり「内的成長段階」)を、最も象徴的に表現し得た「作品」だと、西行自身は、そう確信することができたからでもあるのだろう。

では、もう一度、「……風になびくふじのけぶりの空に消えて行へもしらぬわが思ひかな」という歌について考えてみたいと思うが、まず、「……風になびくふじのけぶりの空に消えて」というのは、例えば、この世の実に様々な「事物」などを見聞きすれば、当然のことながら、西行の「心の中」には実に様々な「思いや感情」などが生じてくることになるが、しかし、だからと言って、それが、いつまでも西行の「心」に留まって、西行の「心」を支配し続けるようなことはないのだということである。それは、具体的には、一体、どういう「心の状態」かと問えば、それは、次のようなものである。——つまり、静かな「湖水の面」に、風が吹いたり、鳥などが飛び立てば、その静かな「湖水の面」には大小様々な「波紋」が広がることになるが、しかし、それもやがては元通りの静かな「湖水の面」(つまり「虚空の如くなる心」)に戻っていくというようなことである。

さて、ここで、もう一度、再確認しておきたいことは、次のようなことである。つまり、「……風になびくふじのけぶりの空に消えて」というのは、まさに「自然の風景」そのものであるとともに、後半部分の「……行へもしらぬわが思ひかな」というのは、逆に、まさに「西行自身の心の動き」そのものであるということである。そして、西行自身は、前半部分の「……風になびくふじのけぶりの空に消えて」と、後半部分の「……行へもしらぬわが思ひかな」とは、ほとんど同じようなものとして、つまり、「自然の風景」と自分の心の「心象風景」とをほとんど「一体化させている」ということである。それは、つまり、目には見えない自分の「心の状態」を、はっきりと目に見える「自然の風景」で表現したということである。——つまり、西行は、自分の最究極の「心の状態」(つまり「内的成長段階」)を、まさに「富士山の風景」で表現したということである。

そして、「……行へもしらぬわが思ひかな」という下の句であるが、多くの人たちは、この「歌」の解釈として、西行の「心の中」には今なお「煩惱」(或いは「迷い」)が残っていて、その「煩惱」(或いは「迷い」)のなかでなおもさまよっている「心的状態」であると解釈している。それでは、西行は、「……人間は、所詮、悟り得ない『煩惱の塊』に過ぎず、それが自分が出家をして何十年も修行した結果であった」とでも言いたいのだろうか？ もし、そうならば、西行は、なんでそんな「歌」を「自賛歌」の筆頭に上げたりののだろうか？ ——つまり、われわれ人間の「心の中」には、絶えず様々な「思いや考え」(つまり「煩惱」)は、絶えることなく次から次へと生じて来るものである。それは、富士の「けむり」がまさにそうであるように、当時の富士の「けむり」も絶えることなく次から次へと生じて来たのだろう。それは、一人の例外もなく、すべてみな同じである。それでは、西行は、一体、どこがどのように違うのだろうか？

それは、次のようなことである。つまり、この世の実に様々な「事物」などを見聞きしたり、あれこれ思ったり考えたりすれば、当然のことながら、西行の「心の中」にも実に様々な「思いや感情」(つまり「煩惱」)は、自然と生じて来ることになるが、しかし、

だからと言って、それが、いつまでも西行の「心の中」に留まって、西行の「心」を支配し続けるようなことは、もうないのだということである。それは、まさに「……風になびくふじのけぶりの、やがては^{おおぞら}大空に消えていくようなもの」であったということである。それでは、なぜそうなのか？ それは、西行の「心の中」は、すでに「^{こくう}虚空の如くなる心」(つまり「^{おおぞら}大空のような無色透明な心」)になっていたからである。それでは、それは、一体、どのような「心の状態」かと問えば、それは、次のようなものである。——つまり、静かな「^{みずうみ}湖水の面」に、風が吹いたり、鳥などが飛び立てば、その静かな「^{みずうみ}湖水の面」には大小様々な「^{なみずうみ}波紋」が広がることになるが、しかし、それもやがては元通りの静かな「^{みずうみ}湖水の面」(つまり「^{こくう}虚空の如くなる心」)に戻っていくというようなことである。そして、「……行へもしらぬわが思ひかな」というのは、その時々^{おおぞら}に生じて来る「わが思ひ」というのは、まさに「……風になびくふじのけぶりの、やがては^{おおぞら}大空に消えていくようなもの」であったとともに、永続して持ち続けている「わが思ひ」のほうも、これからどういふふうになっていくのかは、自分にもよく分からないし、また、これからの「自分の人生の行方」についても、どういふふうになっていくのかは、自分にもよく分からないということである。それは誰だって、明日のこと、将来のことなど、誰にも分かりやうがないものである。なぜなら、誰でも、まさにすべてのものは「^や絶えず変化して止まない『諸行無常の世界』のその真^まっ只中^{ただなか}で生きている」からである。

五、西行とは

ちなみに、西行は、なぜ「出家」をしたのかと問えば、もちろん、それにもいろいろ理由があったかと思うが、その理由の一つとしては、それは、まさに「^{みせ}罪業の因」(つまり北面の武士)からきっぱりと身を引くこと。一つは、和歌を詠みつづけること。(その結果としての「^{うた}歌の成就」であり)、そして、もう一つは、その和歌を詠みつづけることで、最終的にはまさに「^{にし}西へ行く」こと、つまりは「^{こころ}心の成就」であったということである。そうでなければ、どうして「^{にし}西行」などという名前を敢えて付けるだろうか。つまり、「^{にし}西行」という名前を付けたということこそ、まさにそれがそのまま西行が「^{しゅ}出家」をした最大の理由の一つであったことは、まったく疑いようがないではないか。

最後に、西行自身とは、一体、どういう人間だったかと問えば、それは、「……心から心にものを思はせて身を苦しむるわが身なりけり」という、そういう「^{みづかみ}自問自答」を何年も何十年も無限に積み重ねるような人間であったとともに、最終的に辿り着いた地点とは、まさに「^{こくう}虚空の如くなる心」(つまり「^{おおぞら}大空のような無色透明な心」)であったということである。

*

*

「参考文献」

- ※底本 「日本古典文学全集・伊勢物語他」(「小学館」)
- ※底本 「日本古典文学全集・徒然草他」(「小学館」)
- ※底本 「西行」高橋英夫著(「岩波新書」)
- ※底本 「西行の風景」桑子敏雄著(「NHKブックス」)
- ※底本 「モオツアルト・無常という事」小林秀雄著(「新潮文庫」)
- ※底本 「くだもの」正岡子規(「青空文庫」)
- ※底本 「柴文要領」本居宣長著・子安宜邦注(「岩波文書」)